

平定文、本院侍従に仮借（懸想）せる語（今昔物語集卷三十一）

平定文は「平中物語」のモデルで、中途半端な恋愛譚から喜劇的な主人公にされてきた。三譚。最初は、切迫する手紙を送った時の女の返事が面白い。次に夜に女の許を訪問して成功しそうになる話（夜の訪問は平安常識）。最後は、女のオマルを見る話。

1 今昔、兵衛の佐、平の定文と言う人有けり。字をば平中となむ言ける。品も賤しからず、形・有様もうるはしかりけり。気はひなども、物言ひもをかしかりければ、その比、この平中に勝れたる者、世に無かりけり。かかる者なれば、人の妻・娘、いかにいわんや宮仕へ人は、この平中に物言はれぬは無くぞ有ける。

1 傍線は読解に役立つ重要語なので辞書で調べてください。数字は読解で意識するポイント。仮名遣いは一部、面倒なため現代仮名遣いにつき注意（岩波文庫版利用）

2 字（あぎな）とは通称のこと。

しかる間、その時に、本院の大臣と申す人おわしけり。その家に、侍従の君と言ふ若き女房ありけり。形・有様めでたくて、心ばへをかしき宮仕人にてなむありける。平中、かの本院の大臣の御許に、常に行通ひければ、この侍従がめでたき有様を聞て、年来、えもいはず身にかえて仮借しけるを、侍従、消息の返事をだにせざりければ、平中歎きわびて、消息を書きてやりたりけるに、「只、『見つ』とばかりの二文字をだに見せ給へ」と、くり返し泣々と「言ふばかりに、書きてやりたりける。使の、返事を持って返り来たりければ、平中、物に当りて出で会て、その返事を急ぎ取りて見ければ、我が消息に『見つ』と言ふ二文字をだに見せ給へ」と書て遣たりつる、その「見つ」と言ふ二文字を破りて、薄様に押付けておこせたる也けり。平中、これを見るに、いよいよねたくわびしき事限無し。

3 命がけで懸想していたが、

4 物にぶつかるほど夢中でやって来る様。

この辺からおもしろおかしく描かれている。そもそも、平安ロマン常識の和歌が一首もないあたりも笑話的。

これは二月の晦の事也ければ、「きはれ、かくて止みなむ。心尽しに無益也」と思ひ取て、その後、音もせで過しけるに、五月の二十日余の程になりて、雨隙無く降りて、いみじく暗かりける夜、平中「さりとも、今夜行きたらむには、いみじき鬼の心持ちたる者なりとも、哀れと思しなむかし」と思て、夜ふけて雨音止まず降て、目きすとも知らず暗きに、内よりわりなくして本院に行て、局に前々言ひ継ぐ女の童を呼て「思ひわびて、かくなむ参りたる」と言はせたりければ、童、即ち返り来て言はく「只今は御前に人々も未だ寝ねば、え下らず。今しばし待給へ。しのびて自らきこえむ」と言ひ出したれば、平中、これを聞くに胸騒ぎて「さればこそ、かかる夜来たらむ人を哀れと思はざらむや。賢く来にけり」と

5 いったん「止みなむ」と諦めようとして和歌も送らなかつたのに、三ヶ月経って急に思いつく。これも笑うところ？ それで、「いみじき鬼でも憐れむ」というその考え自体も笑える。

6 相手の女性に和歌を渡したりする取次の味方があるのは平安常識。

思て、暗き戸のはぎまにかきそいて、待ち立てる程、多く年を過す心地なるべし。

一時許^{ばかり}有りて、皆人寝ぬる音する程に、内より人の音して来て、遣戸⁷の懸金をひそかに放つ。平中、嬉しきに、寄りて遣戸を引けば、安らかに開きぬ。夢の様に思てこは何かにしつる事ぞと思ふに、嬉しきにも身籥^ふ物なりけり。しかれども、思ひ静めて和ら内へ入れば、そらだきものの香局に満ちたり。平中歩び寄りて、臥所^{ふしどころ}と思しき所を搜れば、女なよやかなる衣一重を着てそびきふしたり。頭様・肩つきを搔き搜れば、頭様細やかにて、髪を搜れば凍^{ひや}を延べたる様にひややかにて当る。平中、嬉しきに物も思えねば籥^ふはれて、言ひ出でむ事も思えぬに、女の言ふ様、「いみじき物忘れをこそしてけれ。隔の御障子の懸金を懸けて来にける。行きてかれ懸けて来む」と言へば、平中げにと思いて「きは、疾くおはしませ」と言へば、女、起て、上に着たる衣をば脱置きて、単衣・袴許を着て行きぬ。

その後、平中、装束を解きて待ち臥たるに、障子の懸金懸ける音は聞えつるに今は来むと思ふに、足音の奥様に聞えて、来る音もせでやや久しく成ぬれば、怪しきに起てその障子の許に行て搜れば、障子の懸金は有り。引けば、彼方より懸けて入りにけるなりけり。しかれば、平中、言はむ方無く妬く思ひて、立踊り泣ぬべし。物も思えて、障子にぞい立てるに、何にと無く涙こぼるる事、雨に劣らず。「かばかり入れて謀る事は、あさましく妬き事也。かく知りたらましかば、そいて行きてこそ懸さすべかりけれ。我が心を見むと思いて、かくはしつる也^なけり。いかにしれはかなき者と思わんすらむ」と思ふに、会はぬよりも妬く悔しき事、言はむ方無し。されば、「夜明くとも、かくて局に臥たらむ。さ有けりと、人知れかし」と、あながちに思へども、夜明方に成ぬれば、皆人驚^{おど}くすれば、「隠れで出でてもいかにぞや」思えて、明けぬ前に急ぎ出ぬ。

さて、その後よりは、「いかで、この人の心けうとからむ事を聞て、思ひ疎みなばや」と思へども、露きようの事も聞えねば、えもいわず思ひこがれて過す程に、思ふ様、「この人、かくめでたくをかしくとも、管^{くだ}にしているらむ物は、我等と同様にこそ有らめ。それをかきさがしなどして見ては、思ひ疎まれなむ」と思ひ得て、「ひすましの管洗ひに行かむを伺ひ、管を奪^{うば}ひ取りて、見てしがな」と思て、さる気無しにて局の辺に伺ふ程に、年十七八許の、姿・様体をかしくて、髪はあこめたけに三寸許足

7 遣り戸は引き戸のこととて、内側の掛金を戸締りにしているのは、源氏物語でも再三出てきている。さて、この話で掛金を開けたのは誰だろうか。童などならば、話をするだろうから、ここは本人本院侍従だろう。しかも、何もしゃべらずに開けているのが面白い。本院侍従の発言は一箇所だけであるが、どれか。

8 体がひとりでに震えてきて。「れ」は自発の助動詞の連用形。

9 自分が通ってきたことを人が知れば良い、という投げやりな気持ちから、堂々とするのはどんなものか、と世間体常識が戻ってきた。平中物語的で、これも笑えるようだ。

10 なんとか、この人の嫌になることを聞いて、嫌いになりたい。

11 平安貴族女性は箱を携帯便器として、オマルの中身は童に捨てさせていたらしい。「汚い話」が笑い話の原点なのは小学生がよく知っている。

らぬ、なでしこ重ねの薄物の袖、濃き袴しどけなげに引き上げて、香染の薄物に笹をつつみて、赤き色紙に絵書きたる扇を差隠して、局より出て行くぞ、いみじく嬉しく思えて、見継々々に行つ、人も見ぬ所にて走り寄て笹を奪いつ。女の童泣たく惜めども、情無く引奪いて、走り去て、人も無き屋の内に、内差しつれば、女の童は外に立て、泣立てり。

平中、その笹を見れば、琴漆を塗たり。裏・笹の体を見るに、開けむ事もいととおしく思えて、内は知らず、先づ裏・笹の体の人のにも似ねば、開て見疎まむ事もいとおしくて、暫く開けで守り居たれども、さりとて有らむやはと思て、おつおつ笹の蓋を開たれば、丁子の香いみじく早う聞ゆ。心も得ず怪く思えて、ひすまし笹の内をのぞけば、薄香の色したる水半ら許り入たり。亦、大指の大き許なる物の黄黒はみたるが、長二三寸許にて、三切うちまろがれて入たり。「思ふに、さこそは有らめ」と思て見るに、香のえもいわずこうばしければ、木の端の有るを取て、中を突き差して鼻に宛ててかけば、えもいわずこうばしき黒方の香にて有り。すべて心も及ばず。「これは世の人には非ぬ者也けり」と思て、これを見るに付ても、いかでこの人に馴れ睦びむと思ふ心、狂ふ様に付きぬ。笹を引寄せて少しひきすするに、丁子の香に染み返へりたり。亦、この木に差して取上たる物を、崎を少し嘗つれば、苦くして甘し。こうばしき事限り無し。

平中、心疾き者にて、これを心得る様、「尿とて入れたる物は、丁子を煮てその汁を入れたる也けり。今一つの物は、ところ・合せ薫を、あまづらにひちくりて、大きな筆づかに入れて、それより出させたる也けり。これを思ふに、かくは誰も為る者は有なむ。但し、¹⁴「これをさがして見む物ぞ」と言ふ心は、いかでかつかはむ。されば、様々に極めたりける者の心ばせかな。¹⁶こは、人には非ざりけり。いかでか、この人に会へでは止みなむ」と思ひ迷ひける程に、平中、病付にけり。さて、悩みける程に死にけり。

極て益無き事也。男も女もいかに罪深かりけむ。されば、女にはあながちに心を染むまじき也とぞ、世の人誇りけるとなむ、語り伝へたとや。

問 助詞「だに」には、1、「さえ」と訳す程度の類推、2、「せめて」だけでも」と訳す願望の最小限、等の用法があるが、A、Cはそれぞれいづれか示し、Bの手紙の内容を訳せ。

¹² さゝ便であろう。

¹³ 人間ではないものだったのだ（天女か何か）。というような結論を平中は導き、この結果、恋愛感情が強化されるのがこの話のクライマックスでもある。

¹⁴ このような作り物はきつとだれでもできるだろう。しかし「俺がオマルを広げて中身を見るだろう」という予測を誰が立てられようか。平中の考え方は客観的合理的であるといえる。

¹⁵ さらに、俺の行為を想定していたという別の点から恋愛感情が強化される。

¹⁶ 「宇治拾遺」にも「今昔」にも載っているこの有名な話はなぜか「平中物語」には載っていない。芥川龍之介が「好色」という小説に、谷崎潤一郎が「少将滋幹の母」のなかでとりあげ、ほかにも瀬戸内寂聴の訳などをはじめ、人気のある話である。